

思い起こすこと

佐藤 恭三

ここ 20 年ほど、LL 授業からすっかり遠ざかっています。入職してからの 10 数年間は生田キャンパスでの金曜日 1 時限あるいは 2 時限の英語 LL 授業が定番の授業だったのですがね。入職直後に LL 授業担当と知って、正直、戸惑いました。僕自身、それまで LL で教えたことも教わったこともなかったからです。機械音痴の僕は LL 機器のボタン操作に恐怖感すら覚えましたし、もっと本質的には、言語習得という極めて人間的な営為に機械・機器を介在させることに強い違和感を抱いていました。大体、90 分の LL 授業を週 1 回やったぐらいでわかることなどおおよそない（せいぜい、その言語に触れるという意味で、まったくないよりはましかも）という認識でした。

ですから、最初の数年間は手探り状態です。英語教材出版社の LL 教材をチェックしても、これはというものが見当たりません。リスニング力強化を謳いながら、ただむやみに聴かせるだけ、あるいはそれにほんの小手先のシャドウイングを加味させただけのもので、これでは教える側の僕も、教えられる側の学生諸君も 90 分の授業に耐えられません。双方の集中力が続かないからです。とりあえず、似たり寄つたりのテキストはできるだけ安価なものに決め、生きた英語を学ばせる方策として、授業の半分を映画鑑賞に充てようと思い至りました。手持ちのアメリカ映画のビデオ（当時は DVD も BD もありません）作品から気に入った映画を、40 分見当でぶつ切りして 3 週で 1 作品を見終わるというやり方です。Taxi Driver (1976 年) のようなスピード感があって難解な映画には字幕付き、To Kill a Mockingbird (1962 年) のようなストーリーが単純でスローテンポな映画には字幕なしでという具合に。その他には、年によって異なりますが、Twelve Angry Men (1962 年)、

The Graduate (1967年), Midnight Cowboy (1969年), Butch Cassidy and the Sundance Kid (1969年), Little Big Man (1970年), Harry and Tonto (1974年), One Flew Over the Cuckoo's Nest (1975年)なども鑑賞させました(個人の好みですから、多少の偏りがあるのは否めませんが)。ところで、効果のほどは? —ちっともわからなかったというのが正直なところですが、少なくとも、モノトーンな授業に彩りを与えてくれたとは言えます。学生諸君も僕も退屈だけはしませんでしたから。

こんなこともやったなあ、と思い返しているところです。外国語教育というのは、教える側から見ると、虚しいものですね。言語は、通常、生まれ育った母国語なら誰でも理解できるものなのに、一旦異語としての外国語の習得となると、事情が一変してしまう。こと英語に関する限り、その習得には膨大な時間とエネルギーが欠かせません。語彙も文構造も大いに異なるからです。教える側がいかなる教授法、いかなる方法論を用いるにしろ、学習者に求められることは母語と異なる語彙と異なる文構造を覚え込むこと、つまり、個々の学習者の任意の「努力」が絶対的要件であって、その限りでは、教える側の出る幕はありません。しかも、学習者に要請されるその努力は記憶するという単純作業なだけに一層耐え難い行為として感得されます。そんな徒労に近いことを学習者に心ならずも強要するわけですから、学生諸君の「笛吹けど踊らず」的対応に遭遇したことは枚挙に暇がありません。なんて因果な「商売」なんだ、と砂を嚙むような思いをしたことも数知れません。

定年退職を迎えるにあたって、こうした状況から解放されることになりました。正直、ホッとしています。勉強は、第一義的に、自らが自らのためにやるものという思いが強い僕は、いわば「ミッドワイフ」としては不適格者だと自認しています。こんな僕が33年間、英語教員としてなんとかやりおせたのは、偏に、同僚教員の優しさあつてのことです。感謝しています。みなさん、ありがとうございました。